

## 小説の終わり方

首藤 静夫

自然の営みの様に描かれている。豊かな自然描写で前と後を囲み、余韻を高めている。

太宰 治『走れメロス』

「メロスは激怒した」で始まり、「勇者はひどく赤面した」で終わる。自分は正しいと感情のおもむくままに突っ走る前半部のメロス。他者を慮り羞恥心から赤くなったメロス。二つの対比である。物語の進行とともに成長していく主人公を描いている。

当会、B・Mさんの『鶴を折る人』

「綺麗な指だった——。」で始まる。終わりは、  
「だから、私は鶴を折った。」

何羽も、何羽も……。

どうか、あの人が無事に私のもとへ還つて来れますように……と」  
息子の折る鶴に見入っている入院中の母。思い出しているのは死んだ夫ではなく、戦地から戻らなかつた初恋の人の綺麗な指だった。  
最後に逆転劇を用意する作者お得意の手法である。

さて皆さんの好みスタイルはいずれですか。

作品の最初と最後をビシッと決めたい、といつも思う。

川端康成『雪国』の冒頭部分。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった」。有名な書き出しである。では、最後はどうか。

主人公の駒子と島村の目前で、火事の炎に包まれた葉子が墜落する。葉子は、駒子の分身だ。駒子は物狂う。島村が、

「踏みこたえて目を上げた途端、さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるやうであった」。ここで幕。

川端の小説は文章が美しすぎて内容よりも印象の方が残りやすい。この最後も鮮やかであるが、内容的には解釈が分かれそうだ。天の河が身体の中へ流れ落ちるとは？ 読者に謎かけをして小説は終わる。

同じく川端の掌編小説『ありがとう』

「今年は柿の豊年で山の秋が美しい」で始まり、

「今年は柿の豊年で山の秋が美しい」で終わる。

作品の内容は自然の風景と関係が薄い。娘を売りに、ある半島の南端の村から山二つ越えた町に、乗合自動車で行く母親と売られる娘、それに几帳面なバス運転手の道中物語だ。残酷な話だが、作為のない